

## 現代中東研究国際センター (The International Centre for Contemporary Middle Eastern Studies) 第9回大会の報告

山尾 大\*

現代中東研究国際センター (The International Centre for Contemporary Middle Eastern Studies) という国際学会がある。これは、中東研究国際連合 (The International Association of Middle Eastern Studies) の理事メンバーを中心に、1996年に立ち上げられた国際学会である。積極的に国際学会を開催し、今年度では第9回目の大会となった。

もう少し、この学会について説明しておこう。本学会は、国際関係において中東が現在直面している問題に焦点を当て、文化とディシプリンを超えた研究者のパートナーシップを形成するためのハブ組織としての役割を担っており、主として中東の現地研究者と欧米の研究者がジョイントする場を提供している。本学会自体が西洋と中東の橋渡しの役割を果たし、両者の絡み合った関係を体現している、と言い換えてもいい。その意味において、北米中東学会 (MESA) とは若干異なる視点で、中東研究を発展させていこうという意識の強い欧州・北米・中東・日本などの研究者を中心に、運営されているのである。本学会は、5年から10年の周期でホスト大学をシフトさせていく仕組みをとっており、当初はキプロスの東地中海大学 (East Mediterranean University) を拠点にしていた。現在は、カナダのヴィクトリア大学 (The University of Victoria) がホスト校であり、次期は欧州、次々期には日本のいずれかの大学がホスト校を勤めることになる、と言われている。

余談になるが、以上で述べたような考え方が、より広範なアカデミアを作っていこうとする動きに結実した例がある。それが、世界中東学会 (World Congress for Middle East Studies: WOCMES) の形成であった。2002年にはドイツのマインツ大学で第1回 WOCMES 大会、2005年にはヨルダンのアンマンで第2回 WOCMES 大会が開催されている (2010年にはスペインのバルセロナで第3回大会開催予定)。現代中東研究国際センターの主要理事メンバーと WOCMES の理事たちの顔ぶれに共通している部分があるのは、決して偶然ではなからう。WOCMES 会長のグンター・メイヤー (マインツ大学) しかり、ホアン・コール (ミシガン大学) しかり、ターリク・イスマーイー (カルガリー大学) しかり、である。

さて、話を現代中東研究国際センターの第9回大会に戻そう。本大会は、2008年3月28日～30日にカナダのプリティッシュ・コロンビア州のヴィクトリアという、西海岸の大都市バンクーバーからほど近い島で開催された。全体の共通テーマは「ムスリム世界と西洋：相近のための新興の手段」(The Muslim World and the West: Emerging Avenues for Convergence) であった (ホームページ <http://web.uvic.ca/hrd/iccmes/>)。つまり、9.11以降、大きな注目を集めている西洋におけるイスラモフォビアの問題、イスラーム世界と西洋のネガティブな緊張関係あるいは軋轢をどのように考えるか、ということが今大会の大きなテーマとなったのである。

9.11以降、西洋諸国とイスラーム世界の関係は大きく変化した。現在直面している深刻だが個別の問題に入る前に、そのような問題が発生するようになる歴史的な経緯を踏まえておかねばならない。とりわけ、本国際学会のような複数の地域出身の研究者が議論をたかかわせる場合は、中東の

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科  
日本学術振興会特別研究員 DC

研究史をクリアにしておくことが重要となる。世界的に高名な中東史家のロジャー・オーウェン（ハーバード大学）の基調講演はそのような任務を背負っていた、という印象を受けた。彼は、半世紀にわたる中東（政治・経済）研究を概観し、アラブ・ナショナリズムや軍事政権研究からイスラーム主義の復興を経て中東研究のパラダイムが変化したことを明確な言葉で説明した。イスラーム主義の台頭を受けて、イスラーム世界と西洋の建設的な関係をどのように構築するか、これを本大会で議論していこう、というのが基調講演の趣旨であった。ヨルダン王子ハサン・ビン・タラールの講演（超過密スケジュールの彼は、残念ながら直前に出席をキャンセルせねばならなかったが、演説を録画したDVDを郵送してきた。ちなみに彼は、同日のBBCのハード・トークに出演してヨルダン政府とハマースの関係を語っていた）もあった。

どのようなセッションが設けられていたのか、見てみよう。

- ・ PLO——その遺産とアジェンダ
- ・ 視覚的に言えば——「我々」と「他者」
- ・ 西洋のディスコースにイスラームを位置づけること
- ・ イラク——どこから、そして、どこへ向かっているのか？
- ・ パレスチナと危機のポリティクス
- ・ 9.11以降のカナダ政府の政策
- ・ 「他者」に対する現代のパーセプション
- ・ 米国と政治的イスラーム
- ・ 苦境に立つイラク
- ・ 西洋におけるムスリムの経験
- ・ 恐怖の戦争——社会と国家へのインパクト
- ・ ムスリムと西洋の関係のポリティクス
- ・ 揺らぐ表象——内部、そして外部から
- ・ メディアにおけるイスラームとムスリム
- ・ ムスリム世界とディアスポラ・コミュニティの社会労働
- ・ 米国の経験にみるイスラモフォビア
- ・ 国際政治の中のイスラーム
- ・ 占領とイラクの高等教育問題
- ・ 高等教育の問題——将来への見通し

このように見てくると、今大会のセッションは大きく3つに分類できることが分かる。

第1に、本大会のテーマとなっている西洋とイスラーム世界・ムスリムの関係である。これについては、実に様々な視座からの議論が展開された。具体的には、芸術に見る西洋の対ムスリム意識の変容、イスラモフォビアに凝り固まった認識の構造とその特徴、メディアにおけるイスラームやムスリムの表象の問題、中東諸国出身の研究者が西洋で活動する際に直面した問題、などである。非常に多くの「生の声」と学術的な分析を目の当りにして、問題の複雑さと根深さを再認識する機会であった。

第2に、パレスチナ問題である。パレスチナ問題は、しばしば文学や表象の問題として研究されることが多いように思われる。しかし、本大会の報告は、より政治的現実に近い問題を扱っていた。具体的には、PLOの歴史の再検証、オスロ合意の問題、2005年選挙におけるハマースの勝利とそ

の後の活動について、などであった。報告者の多くは、主として米国のアカデミアで活動するパレスチナ出身の研究者であった。現代中東を扱う国際学会に出席すると常に受ける印象であるが、あらためて中東研究におけるパレスチナ問題の重要性を認識した。それほど多くの報告があり、中東を考える上で、現地の人々にとっても、研究者の側にとっても、重要な問題なのである。

第3に、イラク問題である。イラクに関しては、一次資料に基づく実証的な研究のほかに、やはり2003年の米軍によるイラク侵攻以降の問題をめぐる報告が多かった。アラブ連盟の代表としてグリーンゾーン内で実務に関わった人物も含まれていた。もちろん、イラク国内の大学で研究に従事してきた学者も貴重な報告を行った。一方で、亡命イラク人研究者による議論も多かった。彼らの報告からは、主として左派系の亡命した知識人が、戦後のイラクをどのように認識しているのか、これ以上ないほど明らかになった。

米国の侵攻による政権崩壊以降のイラクに関しては、国際社会からの注目度が高い分、あるいはインターネットなどのメディアに情報が溢れている分、実務家や国際政治の専門家による議論が積み重ねられる機会が増えている。これは、一方では議論の活性化や研究の蓄積という点で積極的な側面を持っている。しかし他方では、歴史的文脈や実証、腰を落着けた分析が希薄になるという問題点も孕んでいると言わざるを得ない。とりわけ、イラク国内での調査が不可能である現在、現場を「目撃した」人物の見解は、妙に説得力を持ってしまうものである。たとえそれが、グリーンゾーン内部で米国の認識に「歪められた」ものであっても。この問題を克服するためには、イラク研究者が実証的な研究成果を発信し続けるしかないだろう。

以上が、本大会の概要である。まとめておくと、本大会の特徴として次の3点を挙げることができるだろう。一つめは、本学会の性格上、多くの現地研究者が参加していたことである。自らの研究対象地域の研究者との議論は、やはり刺激的で新たな発見が多い。二つめは、中東出身で欧米のアカデミアにおいて活躍している研究者が、実体験も交えながら、イスラーム世界と西洋の関係を議論したことであろう。三つめは、高名な学者や大物実務家が参加して、精緻な議論を行い、生の声を上げたことであろう。

最後に余談になるが、本報告で紹介した国際学会と、イラク研究の関係にも言及しておきたい。現代中東研究国際センターの理事たちは、実は、現代イラク研究国際学会の創設メンバーの中心なのである（詳細に関しては、拙稿の現代イラク研究国際学会の報告『イスラーム世界研究』1巻1号、1巻2号を参照のこと）。ヴィクトリアの学会でイラク関連のセッションが多かったのも、このような理由による。余談ついでに、日本中東学会内部でも、現代イラク研究国際学会の日本支部を、酒井啓子（東京外国語大学大学院教授）を中心に形成する計画が現在進行中である。

今後も、地域や境界を越えた国際的な学会と交流の場に、積極的に参加していきたい。